

※答えはすべて解答欄に記入すること

第1問 次の文章は、谷崎潤一郎が日本人の美意識を描いた随筆『陰翳礼讃』の一節である。  
これを読んで、後の問い（問1～8）に答えよ。

私は建築のことについては全く門外漢であるが、西洋の寺院のゴシック建築と云うものは屋根が高く尖<sup>たかくたかくとが</sup>つて、その先が天<sup>(注1)ちゅう</sup>に沖<sup>ちゅう</sup>せんとしているところに美観が存するのだと云う。これに反して、われ<sup>われ</sup>の国<sup>(注2)こく</sup>の伽藍<sup>がらん</sup>では建物の上にもまず大きな<sup>(注3)おほい</sup>葺<sup>ふ</sup>を伏せて、その庇<sup>ひさし</sup>が作り出す深い<sup>ひろ</sup>廣<sup>ひろ</sup>い蔭<sup>かげ</sup>の中へ全体の構造を取り込んでしまう。寺院のみならず、宮殿でも、シヨミンの住宅でも、外から見て最も眼立<sup>め</sup>つものは、或る場合には瓦葺<sup>かわらぶ</sup>き、或る場合には茅葺<sup>かやぶ</sup>きの大きな屋根と、その庇<sup>ひさし</sup>の下にたゞよう濃<sup>やみ</sup>い闇<sup>やみ</sup>である。時とすると、ハクチュウといえども軒<sup>のき</sup>から下<sup>した</sup>にはドウケツのような闇<sup>やみ</sup>が繞<sup>まど</sup>つていて戸口も扉も壁も柱も殆<sup>ほとん</sup>ど見えな<sup>い</sup>ことすらある。これは知恩院や本願寺のような宏壯<sup>こうそう</sup>な建築でも、草深い田舎の百姓家でも同様であつて、昔の大概<sup>たいがい</sup>な建物が軒<sup>のき</sup>から下<sup>した</sup>と軒<sup>のき</sup>から上の屋根の部分とを比べると、少<sup>すくな</sup>くとも眼で見たところでは、屋根の方が重<sup>うずたか</sup>く、堆<sup>うずたか</sup>く、面積が大きく感ぜられる。左様にわれ<sup>われ</sup>が住居を営むには、何よりも屋根と云う傘<sup>ひら</sup>を拵<sup>ひら</sup>げて大地<sup>いっかく</sup>に一廓<sup>いっかく</sup>の日かげを落し、その薄暗<sup>うすく</sup>い陰翳<sup>いんえい</sup>の中に家造りをする。もちろん西洋の家屋にも屋根がない訳ではないが、それは日光を遮蔽<sup>しきへい</sup>するよりも雨露<sup>うろ</sup>をしのぐための方が主であつて、蔭<sup>かげ</sup>はなるべく作らないようにし、少しでも多く内部を明りに曝<sup>さら</sup>すようにしていることは、外形を見ても頷<sup>うなず</sup>かれる。A 日本の屋根

を傘とすれば、西洋のそれは帽子でしかない。しかも鳥打帽子のように出来るだけ(注5) つば 鰐(注6) つばを小さくし、日光の直射を近々と軒端(注6) のきばに受ける。けだし日本家の屋根の庇(注7) ひさしが長いのは、気候風土や、建築材料や、その他いろ／＼の関係があるのであろう。たとえば煉瓦(注8) れんがやガラスやセメントのようなものを使わないところから、横なぐりの風雨を防ぐためには庇を深くする必要があつたであらうし、日本人として暗い部屋よりは明るい部屋を便利としたに違いないが、是非なくあゝなつたのもあろう。が、美と云うものは常に生活の実際から発達するもので、暗い部屋に住むことを餘儀なくされたわれ／＼の先祖は、いつしか「**一**」のうちに「**二**」を発見し、やがては「**三**」の目的に添うように「**一**」を利用するに至つた。事実、日本座敷の美は全く陰翳(注9) いんえいの濃淡に依つて生れているので、それ以外に何も無い。西洋人が日本座敷を見てその簡素なのに驚き、たゞ灰色の壁があるばかりで何の装飾もないと云う風を感じるのは、彼等としてはいかさま尤もであるけれども、それは陰翳の謎を解しないからである。われ／＼は、それでなくても太陽の光線の這入りにくい座敷の外側へ、土庇を出したり縁側を附けたりして一層日光を遠のける。そして室内へは、庭からの反射が障子を透してほの明るく忍び込むようにする。われ／＼の座敷の美の要素は、この間接の鈍い光線に外ならない。われ／＼は、この力のない、わびしい、果敢ない光線が、しんみり落ち着いて座敷の壁へ沁み込むように、わざと調子の弱い色の砂壁を塗る。土蔵とか、厨(注10) くりやとか、廊下のようなところへ塗るには照りをつけるが、座敷の壁は殆ど砂壁で、めつたに光らせない。もし光らせたなら、その乏しい光線の、柔かい弱い味が消える。われ等は何処ま

でも、見るからにおぼつかかなげな外光が、黄昏色の壁の面に取り着いて辛くも餘命を保っている、あのセンサイな明るさを楽しむ。我等に取ってはこの壁の上の明るさ或はほのぐらさが何物の装飾にも優るのであり、しみ／＼と見飽きがしないのである。さればそれらの砂壁がその明るさを乱さないようにとたゞ一と色の無地に塗つてあるのも当然であつて、座敷毎に少しずつ地色は違うけれども、何とその違いの微かであることよ。それは色の違いと云うよりもほんの僅かな濃淡の差異、見る人の気分との相違と云う程のものでしかない。しかもその壁の色のほのかな違いに依つて、また幾らかずつ各々の部屋の陰翳が異なつた色調を帯びるのである。

尤も我等の座敷にも床の間と云うものがあつて、掛け軸を飾り花を活けるが、しかしこれらの軸や花もそれ自体が装飾の役をしているよりも、C 方が主になつ

ている。われらは一つの軸を掛けるにも、その軸物とその床の間の壁との調和、即ち「床うつり」を第一に貴ぶ。われらが掛け軸の内容を成す書や絵の「コウセツ」と同様の重要さを表具に置くのも、実にそのためであつて、床うつりが悪かったら如何なる名書画も掛け軸としての価値がなくなる。それと反対に一つの独立した作品としては大したケツサクでもないような書画が、茶の間の床に掛けてみると、非常にその部屋との調和がよく、軸も座敷も俄かに引き立つ場合がある。そしてそう云う書画、それ自身としては格別のものでもない軸物の何処が調和するのかと云えば、それは常にその地紙や、墨色や、表具の裂が持つている古色にあるのだ。その古色がその床の間や座敷の暗さと適宜な釣り合いを保つのだ。われ

／はよく京都や奈良の名刹を訪ねて、その寺の宝物と云われる軸物が、奥深い（注9）大書院の床の間にかゝっているのを見せられるが、そう云う床の間は大概昼も薄暗いので、図柄などは見分けられない、たゞ案内人の説明を聞きながら消えかゝった墨色のあとを辿って多分立派な絵なのであるかと想像するばかりであるが、しかしそのぼやけた古画と暗い床の間との取り合わせが如何にもしっくりしていて、図柄の不鮮明などは聊かも問題でないばかりか、却ってこのくらい不鮮明さがちょうど適しているようにさえ感じる。つまりこの場合、その絵は覚束ない弱い光りを受け留めるための一つの奥床しい「面」に過ぎないのであって、全く「E」と同じ作用をしかしていないのである。われらが掛け軸を扱ぶのに時代や「さび」をチンチョウする理由はここにあるので、新画は水墨や淡彩のものでも、よほど注意しないと床の間の陰翳を打ち壊すのである。

(注) 1 沖す ― 高くのぼる。

2 伽藍 ― 寺院の建築物。

3 躰 ― 屋根の棟に用いられる瓦。

4 鳥打帽子 ― (狩猟などに用いたところから) 前庇のついた平たい帽子。

5 鍔 ― 帽子の周辺に庇のように出ている部分。

6 軒端 ― 軒のはし。

7 けだし ― ひよっとしたら。

8 厨 ― 台所。

9 大書院 ― 書院造の表座敷。

問1 傍線部アくキのカタカナを漢字に直せ。

問2 傍線部a「門外漢」、傍線部b「おぼつかない」、傍線部c「名利」の意味を書け。

問3 傍線部A「日本の屋根を傘とすれば、西洋のそれは帽子でしかない。」とあるが、これは日本の屋根と西洋の屋根のどのような違いを表現したのか簡潔に説明せよ。

問4 とに入る語の組み合わせとして最も適当なものを次のアくカの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア (ア: 生活 B: 美)    イ (ア: 生活 B: 陰翳)  
ウ (ア: 美 B: 生活)  
エ (ア: 美 B: 陰翳)    オ (ア: 陰翳 B: 生活)  
カ (ア: 陰翳 B: 美)

問5 傍線部B「陰翳の謎」とは何か。その答えとなる部分を文章中から二十五字以内で抜き出せ。

問6 Cに入れるのに最も適当なものを次のアくオの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 間接の光線を遮る  
イ 鈍い光線に彩を与える  
ウ 陰翳に深みを添える  
エ 砂壁の地色を強調する  
オ 床の間の陰翳を打ち壊す

問7 傍線部D「消えかゝった墨色」とあるが、これとほぼ同じ意味で使われている二字の漢字を文章中から抜き出せ。

問8 Eに入る二字の漢字を文章中から抜き出せ。

第2問 次の文章を読んで、後の問い（問1～7）に答えよ。

A 芥川龍之介の代表作の一つ「戯作三昧」<sup>げさくざんまい</sup>は、来る日も来る日も物語を生み出さねばならぬ仕事<sup>ア</sup>の苦衷を描く。江戸後期の作家、滝沢馬琴を主人公とする歴史小説でもある。

老境に入った馬琴が湯屋で体を洗う場面にはじまる。へ老人は懽然<sup>ぶぜん</sup>として、眼<sup>め</sup>を挙げた：にぎやかな談笑<sup>イ</sup>の声につれて、大ぜいの裸の人間が目まぐるしく湯気<sup>ウ</sup>の中に動いている。

B

に疲れてうつつむいていた馬琴の表情をへ懽然<sup>ぶぜん</sup>と表現している。文化庁が発表

した「国語に関する世論調査」<sup>C</sup>は、本来と違う使い方の広がる言葉の一つにこの語をあげた。

へ懽然<sup>ぶぜん</sup>とは「立腹する様子」の意で使いがちだが、正しくは「失望してぼんやりする様子」

だという。つまり馬琴はぼんやりしていただけで怒っていたのではない。<sup>D</sup>龍之介の意図を

読み違えるのは残念だが、かといって立腹の意が広がるいま、本来の意にこだわるのも困りものだろう。例えば職場でこう言ったとする。「課長、A君は企画を却下<sup>エ</sup>されて懽然<sup>ぶぜん</sup>として

ましたよ」。気落ちした同僚<sup>オ</sup>を氣遣<sup>オ</sup>うはずが、かえって課長の機嫌を損ねそうである。

F 言葉は世につれ…で仕方なしと思う。

(二〇一九年十月三十一日付読売新聞一面「編集手帳」より)

問1 傍線部ア～オの漢字の読み仮名を書け。

問2 傍線部Aの作家による作品を次のア～コの中から二つ選び、記号で答えよ。

ア	羅生門	イ	友情	ウ	高瀬舟	エ	潮騒	オ	こころ
カ	鼻	キ	山椒魚	ク	伊豆の踊子	ケ	細雪	コ	人間失格

問3 Bに入れるのに最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア	旅	イ	交流	ウ	湯治	エ	執筆	オ	闘病
---	---	---	----	---	----	---	----	---	----

問4 傍線部C「国語に関する世論調査」では、「憮然」のほか、「御おんの字」、「砂をかむよう」という慣用句についても調査が行われた。それぞれについて、辞書などで本来の意味とされるものを選び、記号で答えよ。

御おんの字

ア	一応、納得できる
イ	大いに有り難い

砂をかむよう

ア	悔しくてたまらない様子
イ	無味乾燥でつまらない様子

問5 傍線部D「龍之介の意図」とは何か説明せよ。

問6 傍線部E「かえって課長の機嫌を損ねそう」とあるが、その理由を述べよ。

問7 傍線部F「言葉は世につれ…」の「…」にはどんな言葉が続くと考えられるか答えよ。

第3問

①～⑩の四字熟語の

に適切な漢数字を入れよ。(各完答)

①  騎当

②  日  秋

③  里霧中

④  変  化

⑤  分  裂

⑥  鬼夜行

⑦  寒  温

⑧  律背反

⑨  人  色

⑩  扨  扨